

丹波の森づくり第Ⅱ章「つなごう丹波の森づくり」

基本理念：「人」を創り、「森」を（守り）活かし、「農」をはじめとする生業を興すことで、

ビジョンの方向性

安心して住み続けられる、自立した活力あふれる‘ふるさと丹波’の創生

<主な県民意見>

森空間像「豊かな森（に抱かれた空間）を守り、活かす」

- ・ 森に憩い暮す（働く）「もりびと」たちのコミュニティ形成
- ・ 資源エネルギー源としての森の再生－木質バイオマスによる エネ自給率100%
- ・ 集落をまるごとテーマコミュニティに－住まないで働く（遊ぶ）集落の出現
- ・ そこかしこをリノベーションしサードプレイス化－オフィスや創造・交流拠点に
- ・ 空の移動革命が現実に－丹波の空をeVTOL（電動垂直離陸機）が飛び交う

農社会経済像「農の営み、地域の生業を創る」

- ・ 農（森）を中心とした経済社会エコシステムの形成
- ・ MORITEC（森、農、食、コミュニティ×DX）による新しいビジネスの創造
- ・ 生産・サービス、空間管理の無人化、省力自動化（無人農業、ロボット介護等）
- ・ シェアリング・エコノミーによる新しい循環型経済の成立
- ・ 関係人口を巻き込んだ「仮想コミュニティ」が担い手の源泉に

人間像「丹波を愛し、丹波を担う人をはぐくむ」「人と人のつながりを育む」

- ・ 自然と共生する暮らし、農のある暮らし、食の豊かさを享受できる暮らしで自らのライフスタイルを演出（多様な半農半Xの追求）
- ・ シビックテックを駆使し、価値創造に挑むイノベーターとしての市民を輩出
- ・ 多国籍チームによる地域課題の解決－世界の叢智を丹波に結集
- ・ 100歳超のシニアがAI、ロボットの助けを借りて現場の第一線で活躍

<地域の特性・キーワード等>

**共生**：身近な里山での自然とのふれあい 希少種を含む多種多様な生物 **豊穡**：盆地特有の気候と肥沃な土壌から生まれる黒大豆、丹波栗、大納言小豆、山の芋など丹波ブランド **伝統**：民俗文化が脈々と受継がれる地、日本遺産（デカンショ祭・丹波焼）、創造都市 **交流**：山陰道・京街道の要衝、半世紀に及ぶ都市農村交流の歴史 **地勢・地質**：生物が行き交う氷上（水分れ）回廊、篠山層群の恐竜化石 **気質**：温厚な人々、寛容性に富む風土

（丹波の人はあったかい。だから住む）

- ・ 自由に人が移動できるようになれば、住む場所を選ぶ基準は「どこ」ではなく「誰と」住むかが重要になる。人の魅力で人を惹きこむ。丹波の人はあったかい。困ったら助けてくれる地域。だから住みたいと思ってもらえる地域になる必要がある。

（地域に関われば50人に1人は移住）

- ・ 地域のおっちゃんがかっこいい。農作業だけでなく、土木作業などもばぱっとできる。森の中の暮らしができるようになればと思っている。
- ・ 神戸大学から50人実習で来る。関わりを持つと毎年1人ぐらいは移り住む人がいる。

（テクノロジーで田舎のデメリットが消滅）

- ・ 先進地域になれるかが問題。都会よりもいかに先に取り掛かるか。田舎の方がテクノロジーのメリットを享受できる。

（半農半Xで維持される丹波の農業）

- ・ 丹波杜氏は夏場に農業をして冬場は酒造りをする季節労働。半農半X、兼業農家で生活している。
- ・ 大阪に家を持っているが、週末丹波に住んで農業をやりたい若者がいる。

（オンラインでは提供できない丹波のものづくり）

- ・ コロナでオンラインが広がりつつあるが、リアルでしか提供できないものがある。例えば、丹波産のまつたけは丹波でとれるから意味がある。丹波でしかできないものづくりを考えていく必要がある。